せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第八十五号（毎月一日発行）
平成八年十月一日

北海の鰊場 古平風土物語

子供たちの四季の遊びと仕事の手伝い

高橋 源五口

■正月の遊び

やがて正月を迎えると、子供たちは貰い集めた“マッコ”（お年玉）で遊び道具を買うが、おおかたは一円ぐらいのマッコが貰えたようである。

家族合わせ（一組三銭）、いろはがるた（箱入りのものは一組七銭から十五銭）、板がるた（百人一首、一組七十銭から一円）、パッチ（めんこ）などを買って来て遊ぶ。

仲間が集まり焼餅をかじりながら、僅かばかりのりんご、みかん、干いも、かんと豆（ピーナツ）などを賞品にしたりして取り合って遊んだ。

当時、パッチは学校から禁止されていたが、おもしろいのでかくれてやっていた。汗と鼻水を着物の袖で拭きながら、元気いっぱい夢中であった。

こうした遊びは、三月の鰊場まで続くのであった。

■雪道の登校

雪が高く積もる頃になると高学年の男子たちは、屋根の雪下ろしや雪の投げ捨ての手伝いに忙しかった。大雪の年になると町家の人たちは、そりに雪を積んで浜まで運んで行って捨てるのである。

当時、泥の木、鴨居木、畑通り、沖村、群来村方面から通学して来る高等科の男子たちの服装は大人並みで、母親の手作りの厚いドンザ（刺子の着物）を着て目出帽をかぶり、毛唐（けとう＝欧米人をバカにしていう言葉だが、ここでは毛織物、ラシャのようなものをいう・きゃはん）を足に巻いてつまご（わらで作った浅いくつ）を履き、マント（外とう）を被ってがっちりとまかない、朝早くから深雪を踏み分けながら登校して来る。強い北寄りの季節風が吹きしばれのきつい日もあるが、中には女子や小さな子たちを引き連れ、それらをかばい、面倒をみながら勇ましく登校して来る者も多かった。（続く）

アイヌの［ことわざ 世間ばなし集］から

▼メノコシノツのこと

メノコシノツというのは一種の遊びで、十人いたとすれば五人ずつ二組に分かれる。一方が六、七十センチの棒を地面に立ててそれを五人で守る。相手方から一人が出て来て、五人で守っているその棒を奪おうとするが五人がそれを守る。出て来た一人が疲れたときは代わってまた一人が出て来るが、攻める方は一人と決められている相手の棒を奪ったときは今度はこちら側が五人でその棒を守る。

これは昔女を奪い合った名残だというが、今は遊びとして残っているのだという。

＊シノツというのは遊びという意味である。

▼アスミチウのこと

アスミというのは輪、チウとは刺すという意味でこれも遊びであるが、以前は魚を突く、生活の重要な稽古ごとであった。

竿を持った人たちが円陣になると、その中に入った者が竹で作った二十センチ程の輪を空に投げ、落ちて来るところをそれぞれが竿で突く。

見事突き止めた者が、その輪を浜辺の砂の中に仲間に気づかれないようにうまく隠すが、それをまた争って探し出すという遊びである。

―百年の歴史を閉じる―

稲倉石鉱山（6）

●戦時中の賃上げストライキ

昭和十三年十月のこと。低賃金で酷使され、その上労働条件のひどい中で働いていた坑内夫三十人程が、賃上げを要求してストライキを起こした。しかし、期待していた仲間の協力や支援もなく、また会社側では軍需産業であることをバックにこれを全く無視し、逆に賃金カットでこれに対抗してきたため、ストライキは結局一週間程で労働者側の全面敗北で終わった。

そんなことから参加者は会社に居ずらくなり、やがて全員が山から下りて行ってしまった。

●不平不満から

ついに暴動寸前

昭和十六年四月八日、当時、強制労働で二、三百人はいた朝鮮人労働者が団結して待遇改善、特に食事面での改善を要求して会社側と対立し、一時緊迫した不穏な状況となった。この不測の事態に備えて、古平警察署長中川警部ほかが警戒に当る中、会社では、急ぎ本部を稲倉石国民学校に移して交渉に当った結果、ようやく話し合いがつき、最悪の事態はひとまず回避された。食事への不満は、朝食の豆の混入が多過ぎるというものであった。

会社では食事の改善を約束したほか、朝鮮人労働者の要望にこたえ慰安所も設置した。

●軍需を背景に

施設・設備の拡大へ

昭和十四年四月、稲倉石鉱山発展の基を築いた石川利雄所長が本社勤務となり、新しく日野神児が所長として赴任した。

昭和十五年九月、日本・ドイツ・イタリー三国軍事同盟が締結されると同時に、マンガン鉱石の輸入が途絶えたため、稲倉石鉱山のマンガン鉱石は、日本にとって極めて重要なものとなった。

この年鉄興社は古平漁港内の四百八十平方メートルを埋立て、長さ六十メートルの鉱石積み出し用の桟橋（さんばし）を作ったので、トロッコに積んだ鉱石を直接艀（はしけ）に積み込めるようになった。

また、元山に昭和十二年末から月産二十トンの選鉱場を設け、低品位マンガン鉱石の浮遊選鉱試験を行っていたが、昭和十六年八月、この浮遊選鉱法に成功した。その生産高は軍の機密として発表されなったが全国第一位の成績であったという。

●朝鮮人従業員の増加

日中戦争が拡大し、国内の労働力が不足してくると、朝鮮人労働者を募集して来て働かせるようになった。募集の時は好条件を示して連れて来るが、それは現実とはおよそかけ離れたものであった。

「昭和十五年四月三日、当鉱山従業員として朝鮮人約百名が入山」（稲倉石小学校学校日誌）

「（昭和十五年）四月一日、稲倉石へ朝鮮人百名ほど行く」（高野名幸作日記）

朝鮮人従業員の募集は、稲倉石鉱山が独自で行うことはなかった。関係官庁からの割り当てによって受け入れていた。然別鉱山から回されて来ることもあったという。実際の人数は確認されていないが、三百人から五百人ぐらいはいたといわれているが、「一時期には、一千人ぐらいたこともある」と言う人もいる。

昭和四十四年北教組教育研究集会で、当時、稲倉石小学校の木谷孝教諭が発表した報告書によると、

「（略）ほとんどが二十歳前後の独身者であったが、中には十四、五歳の少年もいた。彼らは寮に入れられたが、他の鉱山から移ってきた家族持ちは、日本人と同じ社宅に住んだ。（略）

朝鮮人労働者の募集はその後も盛んに行われ、多い時には五百人（三百人から七百人ともいう）にもなった。また、主に朝鮮人相手の小料理屋が出来、朝鮮人の娘が五、六人慰安婦として住んでいた。これらは会社の指示で経営されていたもので、会社ではチケットを作って売っていた。ほかに楽しみはばくちであったが、これは会社から強く禁止されていた。（以下略）」

―― 続く ――

つぶのことあれこれ

福井幸平

女、子供でも簡単に採れるつぶ、もぐらなくても、裸にならなくとも、食べるくらいならいつでもどこにでもある。時々やどかりが入っているが、これとて魚の餌用に使う人もあった。大きなねぐりつぶと違って、小味なおいしいものです。栗ほどの大きさで、よく持ち帰って煮て食べました。

面白いことに、殻より抜く道具が、木綿針でなければうまくゆかない。抜くコツもカラを回しながら引くと上手に抜ける。浜育ちなら誰でも知っていることだが、白身より内蔵が磯臭くて大変おいしい。木綿針は誰が教えてくれたのかよくわからないが、見よう見まねで覚えたものだろう。

今年、丸山岬の水産高校実習場の磯に下りてみたら、岩に沢山つぶがついていたので、あるだけのポケットにいっぱいつめ込んで来た。孫等と一緒に煮て食べたらなつかしい昔の味がした。こんなこともふくめて故郷古平はいいなぁ！ 元気なうち

に海に山に改めて足を運ぼうと思う。

磯遊び即ちひろき礁かな

これは、ホトトギス主幹高浜虚子の御曹司高浜年尾の古平に来た時の句である。

『在りし日の主人をしのんで』

大型台風に見舞われて (3)

渡辺ハツエ

「災害は忘れた頃にやって来る」まったくその通りです。先人はうまいことを言ったものだとつくづく感ずる、ありがたくない体験をしました。

七年ぐらいも前のことだと思います。十月の末、十数年ぶりといわれる大型台風に見舞われ、わが町古平でも、沿岸漁業に大きな痛手を受けました。わが家は零細漁業で、主人が〇・九トンの船外機付きの小舟でタコ漁を営んで、それで生計をたてておりました。

秋に二か月ほど休漁するだけですが、その期間中もそれまで使っていた漁具の手入れと、これから使うタコ箱漁の準備に追われます。

その秋も、待望のタコ箱漁が始まり、十月二十日の日はほかの皆さんと一緒にタコ箱を海に仕掛け、無事に仕事が終わりました。その日は、ほんとに凪のよい日でした。

時化はその後、突然にやって来ました。台風が去り、まだ時化のおさまらないうちに出漁した主人が、やがて小舟に漁具を積んで帰ってきましたが、それを見て私は唖然としました。苦労して仕立てた漁具が見るも無惨にころがっているのです。

「どうしよう！」

これからまた、この仕事が続けていけるのだろうか。明日からの生活は…。頭の中を不安だけがグルグル駆けめぐって、私はなんにも手につきませんでした。まるで悪夢でも見ているような、そんな気持ちでした。

主人は――と見れば、ただ黙々と傷ついた漁具を整理しているではありませんか。私も黙って手を貸しました。

「こんなことに負けてはいられない。」

そんな海の男の気合いを、主人の顔から感じ取りました。

大漁を願い、また二人でがんばらなくては――。

沢江の山を眺めて

竹内コト

私がまだ学校に入らない前のことですが、父と母に連れられてよく沢江の山に行ったことを思い出します。今にして思えば、山には『山の美』とでもいうようなものがありましたね。

吉田さんのところから登って行くとすぐに尾根に出ますが、そこに田□さんの畑があり、その向い側には私の家の畑、金さん、糸井さんの畑と続きます。ここまで来ると丸山の方から浜町までが見えて、古平市街が一望できます。

その頃私の父は、入船町で鰊場をしていた(六蟇目さんの山廻りを引き受けていました。鰊場では鰊粕を炊くのに多くの薪を使うので、たいていの親方は自分の山を持っていてそこから薪を切り出していましたし、また漁具を作る材料の木もそこから採っていました。山廻りというのは、そのような山をを管理する仕事なのです。

ある日のこと、(六さんの植林地の野焼きをすることになりました。人夫の人が四、五人といっしょに私と母も行きました。

私は皆の弁当の番をさせられていましたが、植林地では、まず野焼きをするための消防線をつくることから始めます。周囲の草を三メートルぐらいの幅で刈り取り、火が燃え移らないようにします。風の様子を慎重に考えて火をつけますが、長い竹竿の先に青草をしばりつけ、竹ぼうきのようなものを作って、それで火の消えた後をよく叩いて火を消して行くのです。その作業が終わるまではご飯も食べられないのです。

野焼きの仕事が終わると、帳場さんをしていた古島さんのじいさんに報告します。

春になると、その場所に松苗を約一メートル四方の間隔で植えるのですが、その後何年かの間は下草刈りとか枝払い、間引きなどの手入れをするのです。枝が混み合ってくると、大風が吹いた時に枝がこすり合い、時には山火事になることがあるのでそれを防ぐためだそうです。ずうと前ですが山へ行った時、立派な松林になっていたのを見ましたが、今はどうなっているのかと、遠くの山を眺めては昔のことを思い出すことがあります。

★古平郷土誌

大正七年に作られた古平町沿革誌では「フルレビラ」「フーレビラ」が古平の語源で「赤岩」とか「赤土山」があるという意味である。と書かれていたが、昭和八年に小学校の先生方が作った古平郷土誌でも、語源についてはそのまま載っていて、学校の郷土学習ではフーレビラ＝赤土の山の意味の方が取り上げられていた。

小学生の時にはじめて古平の語源を知って、「これは多分、丸山のことを言っているのだろう」と思い、それでなっとくしていた。

古平町では『古平町勢一覧』という、折本になっている印刷物をほぼ毎年出していて（昭和十年以前は古平町治要覧）、そのはじめに古平町の沿革が載っているが、古平の語源について書かれているのは昭和十一年版からで、それは古平町沿革誌から引用したものである。

★古平の語源は「フレピラ」

昭和二十九年、古平町開基八十五周年記念として古平町史『ふるびら』を編集することになり、改めて「古平」という地名の語源について研究者の校閲を受けた。それには、「アイヌ語のフル・ピラまたはフレ・ピラが語源であるが、フレ・ピラが正当と思われる。」フル＝丘、フレ＝赤い、ピラ＝崖（がけ）

▽山や崖についていうと、土が崩れて ⬅ （5ページ下段へ）

古平の地名

遥かなる故郷の思い出 [25]
『きつね』の話 (2)

橘 義我 春

〈その二〉

港町のおどご石（男石）・おなご石（女石）のところで、丸山町の或るオッサンが沢江町の嫁どり（婚礼）によばれた帰りに、角巻を着たおなごキツネにだまされて、嫁どりの引き出物の焼魚やようかん、かまぼこなどをそっくりだまし取られた、という話を丸山町の○のおどさんから聞いたことがある。

おどこ石の前を女の人が通るとおどご石が「おいでおいで」をするし、おなご石の前を男が通るとおなご石がやはり「おいでおいで」をする。

今は港町の道路の拡張で、二つの石は削られて小さくなってしまったが、昔は夜になると人通りが少ない上に暗く、子供たちにとってオッカナイ場所であった。

年の暮れになると餅つきが始まるが、私の家では一升の鏡餅をわっぱに入れ、門徒寺（宝海寺）に納めるのがならわしになっていた。鏡餅を持って、そのお使いをするのが私の仕事であった。

その頃、門徒寺に憲ちゃんという若い坊さんがいた。新地町や丸山町方面の檀家回りに来ると必ず私の家に寄り、お茶を飲みながら祖母や母と世間話などをして帰って行ったものだ。私もその憲ちゃんに可愛がられ、友達でもあまり持っていなかった雪の上で履くスケートを貰って、得意になって雪の上を滑りまくっていた。

ある年の暮れのこと、いつものようにわっぱに入れた鏡餅を持って門徒寺に行ったら、ちょうど憲ちゃんがいて、

「寒かったべ、上がってあったまってからゆけ」

と、いろり端へ上げてくれた。憲ちゃんには前から聞いてみたいと思っていたことがあた。それは『霊魂』のことについてだった。坊さんだから、きっと知っているだろうと思っていた。

「憲ちゃん、この世の中に霊魂てほんとにあるもんだべが？」

「うん、ある、ある」

「おっないごどねェげ」

「俺ら坊さんだべ。なんもおっかなくねェてば。おっかながっていだら商売にならねェベサ」

「人が死ぐと、お寺サその霊魂が来るって聞いだども、それ本当だべが」

「ウンだょ。夜中にミシッ、ミシッと、本堂の廊下を歩く音がすることもあるし、鈴（りん）がチーンと鳴ることもあるサ。どんだべ、今度お寺さ泊まって試してみねェが――。」

「ワガネ、ワガネ、おらァ坊さんでねェもの。そったらごどしたらおっかなくて、一晩中寝られねェベサ」

憲ちゃんとこんな話をしているところへ、和尚さん（二代目住職さん）が来た。この和尚さんのことを祖母たちは＊「ゴエンジョさん」と呼んでいたが、そこでまた、和尚さんからこわーい話を聞かされた。

＊いんじょう（引請）＝仏門に入る人たちを高僧の教えに導く師という意味の尊敬をこめた呼び名・教授師）

――つづく――

←（4ページよりつづく）

赤い地肌が現れているもの

▽川についていうと、古川などが停滞し、谷地気で底が赤くなっているようなもの

▽土が崩れて、地肌が現れている崖をいう

「フレ・ビラ」についてはこのような解説がされているが、昭和三十三年版の町政要覧『ふるびら』には、古平町の語源として次のように載っている。

「古平とはアイヌ語のフル・ビラ又はフレ・ビラを現在の用語に当てはめたものと思われ、フルは丘、フレは赤い、ビラは崖を言い総合して赤岩又は赤土山の意なりという。」

古平の語源はあっちへ行ったりこっちへ来たり、大きくゆれている。

（先号のフレルビラはフルレビラの書き間違いでした）

文芸

古平ホトトギス会

通夜にゆく車窓に烏賊火二つ三つ　福井幸平

遠花火終わりしあとの夜景かな

羊蹄の母の古里馬鈴薯の花　仲谷美砂藤

蕗広葉ちぎれて飲める岩清水

川下りゆく舟脚の長閑なる　越野清治

夏めげる磯の掃除も終わりけり

どの顔も花火あかりにあどけなく　大和田絵伊

古平に温泉が湧き天高し

丈余る姉の形見の夏衣　大島喜恵

秋隣り闘病日記尚続く

せりを待つ市場に並ぶ桝の鯖　熊谷楠丈

にわたづみ蜻蛉つながり来て低く

（にわたづみ＝小さな水たまり）

八重桜帰宅を待ちて万朶なる　山口浪

六尺の祭り提灯玄関に

気休めの威し銃とも思わるゝ　越野スミ子

蝦夷にうの花も見馴れし遊歩道

靴紐にまで草じらみついて来し　福井久美子

積丹の大夕焼けの海のいろ

敬老の日見取ることなく兄逝かれ　仲谷比呂子

温泉が出てし眼下にひらく秋の海

移り来て昼も夜も聞く虫の声　斉藤波留

秋の蝶われ先になり後になり

町内の祭り幟の揃えけり　越野敏雄

球場のネットに秋の蝶もつれ

庭の草引くを卒寿の手仕事に　水見句丈

青き踏み卒寿は夢の如くなり

岬短歌会詠草

鬼が沢で蚋に刺され泣きやまぬ長男に熊苺の実をとりてあたへし　竹内　コト

つづきたる雨止みし庭に出でたればわが足に触れこほろぎ跳べり　池田　テル

若き日の制服姿をわれと共に写せし友の新盆迎ふ　金杉　すみ

相寄りて人世の旅をつづけきて金婚式をかぞふるまでに　越野　敏雄

野良猫の姿みえずに二日過ぎぬ雨降らぬ祭に遠出をせしか　長崎　フユ

物忘れ激しき舅が網おこす仕草をしをりベッドの上に　田中　香苗

老いたるも猶なつかしき故郷よ朝毎聞こゆ浄土寺の鐘　水口　キヱ

苗植ゑて育てし菊は伸び立てり開かむとする蕾の淡し　榊　佳代

勤めもつ友へ知らすと留守宅に言葉選りつつゆっくり話す　鈴木　時子

病みあとを厨に立たぬ日びにして孫の呼ぶ声は食事の知らせ　菅原　節子

二十年仰ぐ柱時計は今は亡き君が祝に下されしもの　轟木富美子

初乗りの自転車のかごに庭の花満たして父母の墓を訪なふ　堀　昭子

黄と淡紅の薔薇五十本永く添ひし妻の誕生日に贈りたりしと　山口　スヱ

献眼顕彰の碑を読みゆくにお世話になりし渋谷先生の名あり　丹後　初江

くつろぎし食後に出さむ果物の皿にむくげの花を添へたり　堀　典子

休日の子に届けむと露踏みてトマトピーマン唐きびをもぐ　東　美知

短歌大会終へて帰りぬ霧にかすむ当丸峠をバスに揺れつつ　越田由起子

川柳

蝶とんぼ思いでいっぱい玉手箱　石井愛子

虫の音に忘却の傷また疼く

三日月に話しかけたい子と孫に

相撲狂不況風など知らぬげに　渡辺ハツエ

災いの口から出てる戻らない

平穏で今日も過ごせた老いの幸

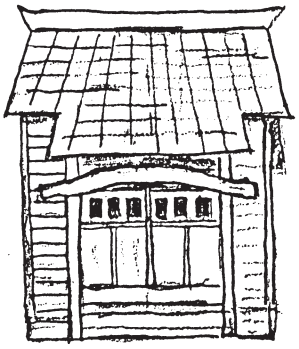
ふるさとスケッチ

廻り淵 稲荷神社

道道古平・神恵内線を古平側から行くと、稲倉石との分岐点の右側に鳥居が見え、やや奥まったところにひっそりと小さい社が見える。これが明治四十年三月、青森県北津軽郡中里村から最初に六志内に入植した打越永吉と、大正元年に入植して来た八戸の人たちで祀った稲荷神社である。入植した人たちは、アワ・馬鈴薯・豆類などを栽培していたが、六志内は市外から遠く不便であったばかりではなく、十分な収穫を上げられなかったので次第に離農する者が多くなり、ついには一戸も残らなくなってしまった。

稲荷神社は保食神（ウケモチノカミ）を祭神として祀り、はじめは六志内にあったが祭事を行う者がいないため、堤の沢の大沢嘉助が自宅の屋敷神として祀った。

その後、昭和二十年頃に現在地の高橋留太郎の土地に移し、廻り淵町内の人たちが、九月十日を例祭日として祭事を行うようになった。



昭和三十年に現在の建物に建て替え、町内の集会所として利用していたが、今は全く使われていない。

古平美術協会・渡辺嘉之